

May, 2019

# Gender equality & Poverty reduction

Vol. 6

ジェンダー平等・貧困削減ニュースレター



Cover Photo: JICA / Atsushi Shibuya

## CONTENTS

- .....
1. 巻頭メッセージ：西野関西センター所長
  2. ジェンダー平等の潮流：第5回国際女性会議 WAW! / W20
  3. 貧困削減の潮流：世界銀行主催第20回「土地と貧困」国際会議に参加して
  4. 案件紹介：エジプト「小規模農家の市場志向型農家改善プロジェクト (ISMAP)」
  5. コラム：①CSW 参加②書籍紹介③東大入学式祝辞④無意識の偏見

## 巻頭メッセージ

毎年 [SDG Index and Dashboards Report](#) で各国の SDGs への取組ランキングが発表されています。2018 年、日本は 15 位と、残念ながら前年の 11 位より 4 位後退しました。取組が遅れている赤信号のゴールは 5 つで、ゴール 12 (生産と消費)、ゴール 13 (気候変動)、ゴール 14 (海の環境)、ゴール 17 (パートナーシップ) と並んでゴール 5 のジェンダー平等が入っています。

女性の国会議員数の少なさと男女の賃金格差が引き下げ要因です。ただ、必ずしも悲観的というわけではなく、賃金格差は改善の方向にあり、女性の労働力率 (対男性比) も上昇中と、政府が進める女性の活躍推進策が効果をあげていると言えそうです。

実際、日本でのジェンダー課題への関心は高まっており、急速に取組が進んでいます。JICA は長年、女性が働きやすい職場として、国内ではトップランナーを走ってきましたが、今や周囲の取組スピードに押され気味です。SDGs の達成に不可欠なイノベーションを生み出すためにも、SDGs 時代を担う若い世代にとって魅力的な職場となるためにも、女性も男性も、誰もが伸び伸びと力を発揮できる、多様性に富む JICA であり続けたいと思います。

(関西センター所長 西野 恭子)

## ジェンダー平等の潮流： 第 5 回国際女性会議 WAW! / W20

3 月 23 日-24 日に東京で「[国際女性会議 WAW!2019](#)」が開催されました。安倍政権の最重要課題の 1 つである女性の活躍推進を象徴するイベントとして 2014 年から開催されており、今回は G20 のエンゲージメントグループである W20 (Women 20) と同時開催されました。初来日のマララさんやバチレ国連人権高等弁務官、女性外相等内外から女性・男性リーダーが集い、2 日間で約 3 千人の方々が参加しました。

JICA からは加藤理事、JICA オフィシャルサポーター伊達公子氏が登壇し、ジェンダー平等と女性のエンパワメントを支援する JICA 事業に関し発信しました。また、安倍総理の開会挨拶において JICA の女子教育支援が具体的エピソードとともに紹介され、日本政府として途上国の女性たちに質の高い教育と人材育成の機会を提供していく旨、表明がなされました。

今回の WAW! で印象的だったことは、中央政府、地方自治体、大学、民間企業、メディア等様々な国内外のアクターが我先にと女性活躍推進の取組や成果を発表していたことです。民間セクターにおいては、企業の経営戦略として女性活躍推進や働き方改革に取り組み、多様で優秀な人材を確保することが会社の成長につながる事が強調されました。多くの企業が経営層および管理職の女性比率をまずは 30% とすることを目指しており、女性のリーダーシップ育成やハラスメントの防止に取り組んでいます。また、企業の女性活躍推進にかかる取組や進捗は、株主や投資家にとっても重要な指標となっていることが指摘されました。

JICA においても組織における女性活躍推進にかかる様々な取組が進められ一定の効果を発揮していますが、外部組織の動きは早く、JICA における取組も加速化していくことが重要と感じました。また、開発面では、女子教育、女性の労働参加率向上に向けた取組の重要、ジェンダーレンズ投資の効果などが活発に議論されました。JICA においてもより一層のジェンダー平等と女性のエンパワメントに向けた取組を、

あらゆるセクターで進めていくことが重要です。

(社会基盤・平和構築部 ジェンダー平等・貧困削減推進室 横田 千映子)

## 貧困削減の潮流： 世界銀行主催第 20 回「土地と貧困」国際会議に参加して (2019 年 3 月 25 日～28 日 ワシントン DC)

皆さんは、途上国人口のうち、どれ位の割合の人々が、自身が利用している土地の権利につき公的に証明・主張できない中で生活していると思いますか。

土地権に関する統計整備は始まったばかりですが、スラムや農村人口を含め途上国人口の実に **7 割**の人が、公的に証明できる土地権を持っていないという推計があります。土地権がないということは個人・社会レベルで様々な問題を生じさせます。例えば、立ち退きリスク、農地改良などへの投資意欲の欠如、抵当権がないことによる融資利用不可、民間投資忌避による発展阻害、土地紛争等々。

こうした状況も踏まえ、本会議は土地ガバナンスの改善と「万人の土地権確立」を目指し、Catalyzing Innovation をテーマとして開催され、約 1,500 人の参加者を迎えて様々なトピックが議論されました。貧困及びジェンダーに密接に関連する「万人の土地権確立」については特に以下 3 点が重要と思われました。

- ① 実態的土地権の尊重・保障と技術活用、FFP(fit-for-purpose)：土地権に関する近年の議論は、法的根拠に基づく土地権から、スラム居住や農村の慣習地利用などに見られるより実態的 (*de facto*) 権利を「正当な権利 (legitimate rights)」として認め、その尊重・保障を推進する方向に移ってきている。こうした実態的土地権の確立に向けては関連する情報の整備と公的認知 (証書発行等) が必要となるが、こうした一連のプロセスを地上測量に比し若干精度が下がったとしても、住民参加型かつ衛星・ICT、AI 等先進技術を活用しより安価、迅速、公正に進める FFP アプローチが求められている。
- ② 慣習地 (customary land) とそこにおける土地権の扱い：土地権確立に向けては首長等により保有・管理される慣習地の問題は避けて通れない (特にアフリカ)。慣習地間の境界、慣習地内の土地権の所在と内容は曖昧であり、その取引はインフォーマルで実態把握が困難。土地行政システムが十分機能していない状況では FFP 活用が推進されるべきであり、好例も出ている。ただし、単に首長が管轄する地域や彼らの土地権確立のみでは、彼らによる不当な権限乱用 (土地収奪) にもつながりかねず、慣習地域内の人々、特に、貧困層・脆弱者層、女性の土地権保障の同時推進、および土地についての陳情・紛争処理のあり方の検討が重要。
- ③ 女性の土地権確立：本イシューに関する本質的な問題の所在は、実体法上の規定と実態の乖離。実定法上では女性が不利になるような記載がない場合にも、文化規範に基づく慣習的なプラクティスのために、女性に土地権が付与されにくい状況となっている。そのため、女性の土地権確立に向けたアドボカシー強化、ジェンダー分析・視点にたった土地政策・事業推進、

夫婦両姓名義の土地登録の義務化（法制化）の重要性が指摘された。会議最終日には世銀、GLTN 他4団体のイニシアティブのもと女性の土地権確立に向けたグローバルアドボカシー活動である’ Stand for Her Land’ キャンペーンのローンチあり。

土地は全てのセクターに絡み、土地権保障・確立はSDGsのenablerとして非常に重要です。JICA事業でも今以上に土地権を意識した案件形成・実施が推進されることを期待します。

（国際協力専門員 菅原 鈴香）

## 案件紹介：エジプト「小規模農家の市場志向型農業改善プロジェクト (ISMAP)」 (2014.5～2019.4)

本プロジェクトは、上エジプト農村地域の小規模農家の所得向上を目指し、農家の「作ってから売る」から「売のために作る」という市場志向型の意識の転換による営農改善に取り組む案件です。対象地域は、ジェンダーに関する保守的な社会規範が残っており、女性が男性とともに屋外の畑で農作業に従事することは決して多くありません。しかし、それは女性が営農に関わっていないということを意味するものではありません。むしろ小麦やメイズなどの収穫・処理や、搾乳、家畜の世話など、女性たちは多岐に渡る活動に携わり、家計に貢献している営農の「主体」なのです。



プロジェクトでは地域の男女隔離規範に配慮しつつも、女性たちも男性と同様に営農に関する新技術を習得し、収入向上の機会を得られるよう、女性専用のオリエンテーションや研修を実施しながら女性たちによる小規模ビジネスの実践を支援してきました。生まれてからこれまでに村を出たことのない女性たちが市場調査に出かけ、いつ何がいくらで売れるのかを知るとともに、コスト計算の仕方や事業計画の作り方などについて学んだ結果、彼女たちはビジネスの実践に向けたその能力を大いに開花させ、収入を向上させました。

また、女性たちは、家庭内での発言力を高め、その行動範囲を広げてきています。こうした女性たちの姿によって男性たちの意識も変わりつつあります。ビジネスを楽しみ、たとえ「夫がビジネスを辞めるといっても辞めるつもりはない」と言い切る女性たちは輝いています。

（社会基盤・平和構築部 ジェンダー平等・貧困削減推進室 宇佐美 茉莉）

## コラム①：第 63 回国連女性の地位委員会に参加して

2019年3月11日～22日、ニューヨーク国連本部にて、第63回国連女性の地位委員会（the 63<sup>rd</sup> Commission on the Status of Women: CSW63）<sup>1</sup>が開催され、JICAは日本政府代表団の一員として会期前半の1週間参加しました。CSWでは毎年優先テーマが設定され、一般討論、各種閣僚級会合や専門家会合などが行われますが、今会期の優先テーマは「ジェンダー平等、及び女性と女児のエンパワメントのための社会保護システム、公共サービス、及び持続可能なインフラストラクチャーへのアクセス」でした。<sup>2</sup>



開会式にて、ネーソン CSW63 委員会議長によるステートメントの様子。1800人以上収容できる総会ホールは満席状態。別の会議室でも開会式の様子が視聴できるようになっていました。

JICA入構後の初出張、初めての国際会議出席でしたが、世界中のジェンダー平等と女性のエンパワメントに向けた取組と、また参加者たちのエネルギッシュな姿（ニュージーランド代表が生後半年の子どもを連れて一般討論を行う姿など）に常に刺激を受け、感化され続けた一週間となりました。中でも一番エネルギーを感じたのは、一般市民の活力。会期中は、NGOをはじめとする団体が優先テーマに関係した様々なイベントをNY市内の至る所で開催しており、その数なんと500以上！

世界中から9,000人以上が集まり、その熱気は凄まじいものでした。国連の会議でこれほどまでに参加者が多いのはCSWだけとのこと。こうした風景を目の当たりにし、日本では「ジェンダー」の課題は、まだまだ「他人事」であるような風潮がある一方で、世界の多くの人が「自分事」として主体的に取り組んでいることに嬉しいギャップを感じました。また、ユース世代の参加率も高く、ジェンダー問題を自分たちの課題として捉え、行動を起こそうとするユース世代の声がCSW63の合意文書に汲み取られたことも印象的でした。

世界中の人からパワーをもらいつつ、「このパワーに圧倒されるだけでなく、自分として貢献できることは何か。JICAとしてやらなければならないことは何か」ということを真剣に考えた一週間。まずは、インフラ・都市開発分野でのジェンダー課題について関係者の認識を高め、そして互いの知見を共有しながら、JICAのインフラ・都市開発案件のジェンダー主流化を進めていきたいと思えます。「鉄は熱いうちに打て」。CSW63で自分が得た刺激を還元できるようにしたいと思います。

（社会基盤・平和構築部 都市・地域開発グループ 照下 真女）

## コラム②：書籍紹介

～The Last Girl: My Story of Captivity and My Fight against the Islamic State

～

Nadia Murad and Jenna Krajeski 著/ Tim Duggan Books /2017年11月

<sup>1</sup> CSWとは、1946年に設立された国連機能委員会の一つです。女性に対する差別の撤廃と地位の向上に向けた各種施策のモニタリング及び進捗状況の評価を行い、経済社会理事会に勧告・報告・提案等を担う役割を担っています。

<sup>2</sup> 詳細はURL参照：<http://www.unwomen.org/en/csw/csw63-2019>。

2018年ノーベル平和賞を受賞したナディア・ムラド氏。ナディアはイラクの農村で、家族で玉ねぎを収穫してパンを焼き、学校に通い、美容室のオープンを夢見てヘアメイクの練習をする、平凡だけれども幸せな、ちょっと負けん気の強い女の子だった。ISILによる虐殺と支配が始まるまでは。

圧倒されるのは、苛酷な経験もさることながら、ナディアの持つ、家族、コミュニティ、そして同胞への愛の強さと正義感である。この正義感は時に読者に居心地の悪さをつきつける。「すぐ目の前で奴隷として搾取されている女性がいることをそのまま黙って見過ごす」傍観者を、「宗教が何であれ、私の母は決してそのようなことはしなかった」という言葉で痛烈に批判する。

「このような暴力があることを知っていながら、傍観している世界を、身近な社会を、あなたを、私は決して許さない」自分自身を最後の犠牲者とすべく、人権活動家としての彼女の強さを支えるものは、この思いに他ならぬ。

本書はまた、性暴力がただ凄惨だけでなく、武器そのものであること、テロ組織を維持するマシンリーであることをも明らかにしている。

(社会基盤・平和構築部 ジェンダー平等・貧困削減推進室長 亀井 温子)



### コラム③：2019年東大入学式 上野千鶴子先生の祝辞について

今年の4月、東京大学の入学式で、上野千鶴子さんが新入生たちに送った[祝辞](#)が話題となっています。冒頭で、東京医科大不正入試問題に触れ、日本で横行している性差別や女子学生が置かれている現実について、事実に基づき、わかりやすく語られています。

その中で、上野先生は、意欲の冷却効果 (aspiration の cooling down)、男性の価値と女性の価値、フェミニズムについて次のように語っています。どれも、一人の大人として、自分の考え方やふるまいについて考えさせられる内容です。

- 「どうせ女の子だし」「しょせん女の子だから」と水をかけ、足を引っ張ることを、意欲の冷却効果という。マララさんのお父さんが、「どうやって娘を育てたか」と訊かれて、「娘の翼を折らないようにしてきた」と答えているが、多くの娘たちは、子どもなら誰でも持っている翼を折られてきた。
- 男性の価値と成績のよさは一致しているのに、女性の価値と成績のよさとの間にはねじれがある。女子は子どものときから「かわいい (=相手を絶対におびやかさない)」ことを期待されるため、女子は、自分が成績がいいことや、東大生であることを隠そうとする。
- フェミニズムはけっして女も男のようにふるまいたいとか、弱者が強者になりたいという思想ではありません。フェミニズムは弱者が弱者のまま尊重されることを求める思想です。

最も印象的だったのは、知を身につけた者として、どのように社会と関わるのかという点に触れた下記の部分でした。この新入生へのあたたかいエールにとっても共感しました。上野先生の文章を読むといつも、フェミニストでいるのって素敵だなと思います。

- あなたたちのがんばりを、どうぞ自分が勝ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれないひとびとを貶めるためではなく、そういうひとびとを助けるために使ってください。

(社会基盤・平和構築部 ジェンダー平等・貧困削減推進室 京 由香)

## コラム④：無意識の偏見

日常生活の中で普段何気なく見たり聞いたりしているけれど、ちょっと立ち止まってジェンダー視点から考えてみると、「あれ、それっておかしいんじゃない？」と思うことって、ありませんか？

今日、ご紹介するのは、近所のコインランドリーに貼ってあったこのポスター。

あーまた花粉症の季節が来たんだな、今年こそなったらどうしよう、などと思ったのも束の間、よく見るとポスターには花粉症で涙と鼻水まみれと思われるお父さんと子どもたち。。お母さんの姿はありません。「あれ、家族の中でお母さんだけ花粉症じゃないっていう設定なの？お母さんも花粉症だったらどうするんだろう？そもそも洗濯はお母さんだけの仕事なの？」

コインランドリーの使用を促すための一見「中立的な」広告ですが、そこでは同時に家事やケア労働についての男女の役割意識に関する隠れたメッセージが発せられています。そんなメッセージに慣れてしまうと、それが当たり前になっていきます。だからこそ、日常の小さなことでも、「自然」に見えるものこそ、別の見方はないのか考えてみる習慣と余裕をもちたいものです。

(社会基盤・平和構築部 ジェンダー平等・貧困削減推進室 宇佐美 茉莉)



## 終わりに

ニュースレター第6号はいかがでしたでしょうか？読者の皆様からのコメント・感想をお待ちしております。

(編集責任：宇佐美 茉莉)

(デザイン：泉 貴広)